

## 6 未来へのフロンティア、

### カリフォルニア

#### 6.2 アメリカポストモダンの旅

長く働いた SOM をやめて、UCLA の大学で  
教えている、建築家ピーター・ケミニツア  
の設計事務所で、シニア・デザイナーとして

働くことになった。彼の事務所では、集合住宅のプロジェクトが多く、大学のキャンパス  
や劇場のプロジェクトもあった。1984年の頃である。所長の白髪のピーター・ケミニ  
ツアは、ユダヤ系アメリカ人であった。私とはたいへん気があった。彼はハーバード大  
学とコロンビア大学で都市計画を学んだ。どちらかというプランナー、アーバンデザイ  
ナーであったから私に思う様に建築の設計させてくれたので、私は楽しかった。彼は、私  
に面白いプロジェクトを担当させてくれた。なかでも劇場設計は面白かったが、また難し  
かった。この劇場は、大学のドラマ・スクールのものであったが、予算の関係で他の学部  
から援助があり、多目的用の実験劇場にしなければならなかった。イギリスの伝統的な馬  
蹄型の劇場のプランが要求され、その上、現代的なデザインで造る実験劇場となった。い  
ろいろな建築分野の問題が複雑に重なり合っていた。例えば客席全部が上下に移動するこ  
とができ、客席の椅子がすべて自動的に床の下に入ることができ、床が平らになり、いろ  
いろなパーフォーミングをこなせる劇場に変ることができた。そして、劇場全体がダンスホ  
ールにもなる多目的なホールにもなった。又、天井はテニスのラケットの様に、テンショ  
ンのワイヤーを張り、そのネットのような上を自由に歩くことができ、空中を歩く感じで、  
演劇や演奏の為に曲面の音響板やスポットライトの調整等を学生が自由自在に操作出来  
る様にした。いろいろな用途をこなせる劇場の形に変形することができた。建物そのものの  
設計も難しかったが、専門家の各技術者とのコーディネーションもさらに難しかった。長  
いことかかったその難しかった劇場設計が終わった。大学当局はそのグランドオープニ  
ングのパーフォーミングの時にピーター・ケミニツア夫婦と私夫婦に一番良い席、センターのバ  
ルコニーの席に座らせてくれた。ピーター・パンの劇であった。天井から釣らされた紐に操  
られピーター・パンが客席の上空を飛んだ。音響や照明もその他の仕掛けも学生たちはうま  
く操作出来たようであった。大変好評であった。このパーフォーミングを見た時あの大変だ  
った設計の苦勞を忘れることができた。

ここ何年か働きどうして休暇をとっていない。最近の建築をあまり見てないし、新しい  
アメリカの建築を見て歩きたいと思った。ポストモダンの建築が全盛時代の時だった。



KECK THEATER

DEDICATION  
AUGUST 5, 1989

OCCIDENTAL COLLEGE  
LOS ANGELES

オキシデンタル大学の多目的用の実験劇場、予算がないに  
もかかわらず複雑な要素が入った建築になった。



客席の椅子が床の下に  
入り、床が真平らになっ  
たところ。ワイヤーで張り  
詰められた天井の上は  
屋根裏のライトを点ける  
とすべてが見える。

通常の段々状した客席の  
位置。シェクスピアーの  
時代の木造の内装にした  
かったのだが予算がなく、  
色だけでも暖かみのある  
木の色にした。





エクソンビルディング、  
ジョンソン設計1976年  
ヒューストン

テキサスバンクタワー、  
ジョンソン設計1982年  
ヒューストン



1985年の10月、2週間のバケーションをとって、私は一人で南部、東部、それに中西部の建築視察の旅に出ることにした。まずはヒューストンのSOMに行き、リチャード・キーティングと、かつての仲間達と会った。私がヒューストンを去った後も沢山の超高層の建物の設計のプロジェクトが入ったという。キーティングは彼の秘書に私がかつて設計に携わった各建物のオーナーに電話をさせ、それらの建物を視

察出来る様の手配してくれた。あのグリーンジャイアントと呼んでいたグリーンのガラスの71階建ての超高層のビルは設計変更なしで、基本設計通り建てられているか気になっていた。我々が高さ3メートルの模型を作ったものとまったく同じに建てられていた。プラザから見上げると、71階建てのビルが青い空に突き刺さるに透視図の線が空に向かって延びていた。かつて、私が描いたフリーハンドのスケッチによく似ていた。私は1階のロビーから60階までノンストップで上がる2階建てのエレベーターに乗った。速く、まったくスムーズであったが耳が痛くなった。その60階のスカイラウンジの吹き抜け空間でエスカレーターに乗り、そして各階止まりのエレベーターに乗り換え、71階まで行った。平たいヒューストンの地平線が丸く見えた。又、私が相当に時間を費やした1階やプラザの詳細を見て回った。まさか、とても造ってくれると思わなかった御影石をくりぬいて彫刻的にデザインした大きな階段の手すりが出ていた。プラザから地下に降りる大きな階段横の壁に大きな御影石を入れ、それを削りこみ造った手すりである。まったく彫刻的に出来上がっていて感激した。と同時に金があったのだなーと思った。ヒューストンのダウンタウンや郊外には、この5年間で沢山の超高層や大きな建物が建てられた。街は変わったと思った。SOMの私の部下だったロブから聞いた話だが、この71階のビルが完成してまもなく大型のハリケーンがヒューストンを直撃し、隣の40階建てのビルの屋根に敷いてあった小石が飛ばされ71階のビルの窓ガラスにあたり、割れて一枚落ちた。すると、風圧の関係でドミノ式にそのフロアーのガラスがほとんどポップアップする様にはじきだされて、サイドウォークに落ちたという。すさまじいものだったという。幸運にも死者は出なかったという。これと似た様なことが1970年代にボストンでも起きた。そ

それは、アイ・エム・ペイの設計した細長い板の様なビルで、空に飛び出た様な大変美しいプロポーションの超高層ビル、ジョンハンコックビルである。風の強い冬の良く晴れた日に、一枚のガラスがポップアップした。それに続いて次々とガラスが落ちた。ビルがバイメタルの様に南側が暖かくなり膨張して、あるいは、風圧で建物が多少よじれ、カーテンウォールの納まりが十分でなかったとかいろいろ理由があったようである。ベニヤ板が外壁のカーテンウォー

アライバンクプラザ、  
SOM 設計1979年、ヒューストン  
シンプルクリーンのグリーンガラス  
の半円柱のタワー。

ジョンハンコックタワー、  
I.M.ペー設計1973年、ボストン  
シンプルクリーンのブルーガラス  
の板状のタワー。







AT&T のビル、ジョンソン設計1980年、ニューヨークのビルの谷間にかろうじて見ることが出来た。これがポストモダン建築の始まりとなった建物である。

ルにパッチワークの様に張られており、悲惨なものであった。超高層のガラスが一枚落ちると大変なことになる。

友人の家に2～3日滞在し、ダラスやフォートワースへ再度行って見た。これらの市も同様に新しい

建物が沢山建ち並び街が変わった。トロフィービルディングと呼ばれるポストモダンの建物が沢山あった。その中にひときわめだつ SOM, キーティングの設計による超

高層、2つが対照的に建てられていた。I.M.ペーの設計したひし形をよじった様なグリーンガラスのオフィスビルも競う様に建っていた。カーンのキンベルミュージアムをもう一度訪れた。綺麗な物は何度見ても気持ちが良い。この建物に来るのは4回目になる。

その後テキサスからニューヨークへ向かった。SOM時代の友人、スティーブがニューヨークにいたので彼に会いに行った。彼はI.M.ペーの事務所で働いていたので事務所を見せてもらった。ニューヨークにはAT&Tのポストモダンの建物をはじめたくさんの新しい超高層ができていた。昔歩いた様にビルの谷間を歩き回った。そして、あの思い出の滝のあるペリーズパークにも行って見た。やはりすばらし空間であると再度認識した。

その後ワシントンD.C.に建てられたI.M.ペーの設計のミュージアムを見に行った。I.M.ペーは若い時、中国の上海からアメリカに移民した建築家である。中国では通常、三角形の建物は風水の関係でつくらないのだが、彼の作品は三角形のプランがおおく、正確なモジュールで機械の様に出来ている。又、アメリカで最も美しいコンクリートの建築をつくるのは、カーンか、I.M.ペーであるといわれていた。ペーの建物は美しいが身が引き締まる様に冷たく感じることもある。

それは彼の建築の美は幾何学的な形から始まると言っているからかもしれない。ワシントンで、もう一つ見たかったのは、マヤ・リンによって設計された、ベトナムメモリアル記念碑である。彼女も又、中国系アメリカ人であり、イエール大学の大学院の学生の時、コンペで勝った作品である。シンプルな「V」の形を地面にきり込むようにできている。磨いた真っ黒な御影石の壁は強烈なイメージが受けられた。この有名な二人の中国系ア



両サイドの超高層ビル、チェスタワー・とラムクロ・タワー、ダラス、テキサス、SOM(Richard Keating)設計1982年、ポストモダンの全盛時代。彼の個性を一番良く出している建築。

ミュージアム、I.M.ペー設計、1980年、ワシントンD.C.

ベトナムメモリアル記念碑、マヤ・リン、設計1980年ワシントンD.C.







世界一高かった眺望台シアーズタワーからシカゴのダウンタウンを見る。この街も深い現代建築の歴史が刻み込まれている。

リカ人の建築家は風水学に反抗するかの様に、中国では三角形のプランを作るのはタブーとされているのだが、なぜか反抗するかの様に、アメリカで彼らは同様に三角形の幾何学的な強い線を出して設計していた。



イリノイ州庁舎の円柱のアトリウム、ハマーヤーン設計、1980年。

その後、シカゴに飛んだ。私はシカゴに来たのは初めてであった。シカゴは現代建築の歴史が深く、充実している街である。超高層ビルの歴史も深く、サリバンの時代の1880年代のビル、詳細も深く黒光して残っていた。構造体を強調したSOMのビルも沢山あった。ハマーヤーンのポストモダンのビルは、まだ出来たばかりで光っていた。ダウンタウンだけでもリッチなデザインの歴史を十分に物語ってくれる。その当時、世界一高かったSOM設計のシアーズタワーに上った。その展望台から少なくとも行かなければならない建物の方向を探した。ミースの設計したIITの大学(イリノイ工科大学)のキャンパス、フランク・ロイド・ライトのロビーハウスやライトの住宅が建ち並ぶオークパークの住宅地、巨匠といわれた建築家達の建物である。ドイツからグロピュースはボストンに移り、ハーバード大学で自分のスタイルのカリキュラムをつくって、建築を教えてきた。ミースはドイツからシカゴに移り、IITでキャンパスをつくり、建物をつくり、自分のスタイルの建築を教えた。このIITの建築教育は、彼のデザインコンセプトを貫いているという。SOMの友人のクレグは本当はこんな建築の学校をつくりたいのかもしれない。フランク・ロイド・ライトの一連の住宅や教会を見て回ったが、繊細な詳細であるがもう歴史の中の建物という感じがした。ル・コルビュジェのあの力強さというか、いつになっても新鮮さがある建物とは異なると感じた。

私はこの旅行でも十分に建築をみたまはらずであるが、計画してあるシカゴから車で4時間位の所にあるインディアナ州の小さな街コロンバスに行かなければならない。この街には、ほとんどの大きな新しい建物や公共の建物は、アメリカの有名な建築家によって設計され

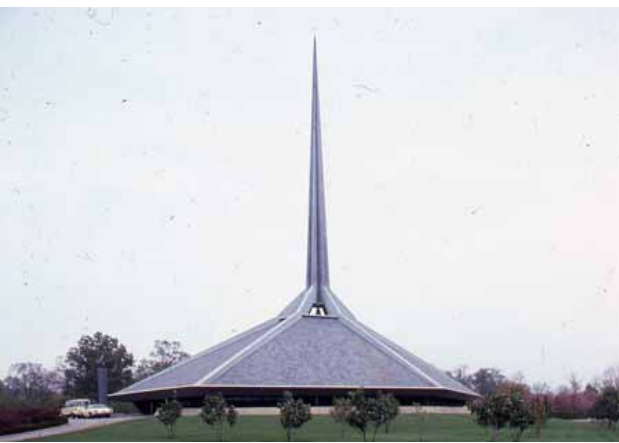
IIT 大学キャンパスのクラウンホール、ミース設計、1960年



ロビーハウス、F.L.ライト設計1930年、シカゴ







教会、E.サリネン設計、1960年、コロンバス、I.N.

て建てられた。アービン・ミラーという実業家が設計費を補助して、街を美しくする為に、各施主にそうさせたのである。本当に小さな



コロンバス市庁舎 SOM 設計、1980年、三角形のプランと半円のコートヤードと片持ち梁が中に浮いている。

街であったが、建築のミュージアムの様にいろいろなスタイルのデザインの建築であった。ディズニーランドや明治村と違うオリジナルの現代建築である。オフィスビル、教会、学校、集合住宅、工場、消防署、ショッピングセンター、等の建物が、選ばれた有名な建築家によって設計されていた。こんなにも沢山の建物が有名建築家に設計され、一箇所に集まっている所は他にないだろうと思った。遠くの田舎の街に来た甲斐があったと思った。

シカゴに戻り、そこから最後の旅行地、ミネアポリスへ飛んだ。街の中心を縦断するかの様に曲がりくねっている歩道ニコレットモールがつくられている。その通りに沿って良いデザインの建物が沢山あった。それを見たかったこともあるが、もう一つの大きな目的に SOM のヒューストンの時代に設計に携わった 40 階と 27 階建てのツインタワーと一緒にプロジェクトが完成し、それを見たかった。私はふたつのタワーの間につくられた 6 階の高さのアトリウムの吹き抜け空間を主として設計した。それらの詳細は私がすべて描いた。まったく図面どうりの詳細で、模型どうりの空間が出来上がっていた。しかし予想していた以上に大きな空間だった。私はこの二つのビルよりもその間に造られた空間の方がはるかに面白く、素晴らしいと思っている。暑さを避けるためのヒューストン地下のトンネルのコネクションとは異なり、ミネアポリスの冬は大変寒く、ダウンタウンの中心の建物はオーバブリッジで 2 階から道路を越えてガラスに囲まれた橋で繋がっていた。このツインタワーのピルズベリーセンターの建物にも 4 コーナーに通りを跨ぐガラスの橋がかけられた。その橋から通りの動きが良く見ることができた。この街の中も建築を見ながらよく歩き回った。今回の旅行でも十分に建築を見た。そこからロスアンゼルスに戻った。

ミネアポリス市のダウンタウンの中心を縦断するニコレットモール。サイト設計 1960年。部分的に歩道を広くし、曲がりくねった車道にした。交差点にはビルとビルを繋ぐ通りを跨ぐガラスのオーバブリッジが架かっている。

ビルズベリーセンター、SOM 設計、1978年。ビルの中を斜めに横切るアトリウムとトップライト。

